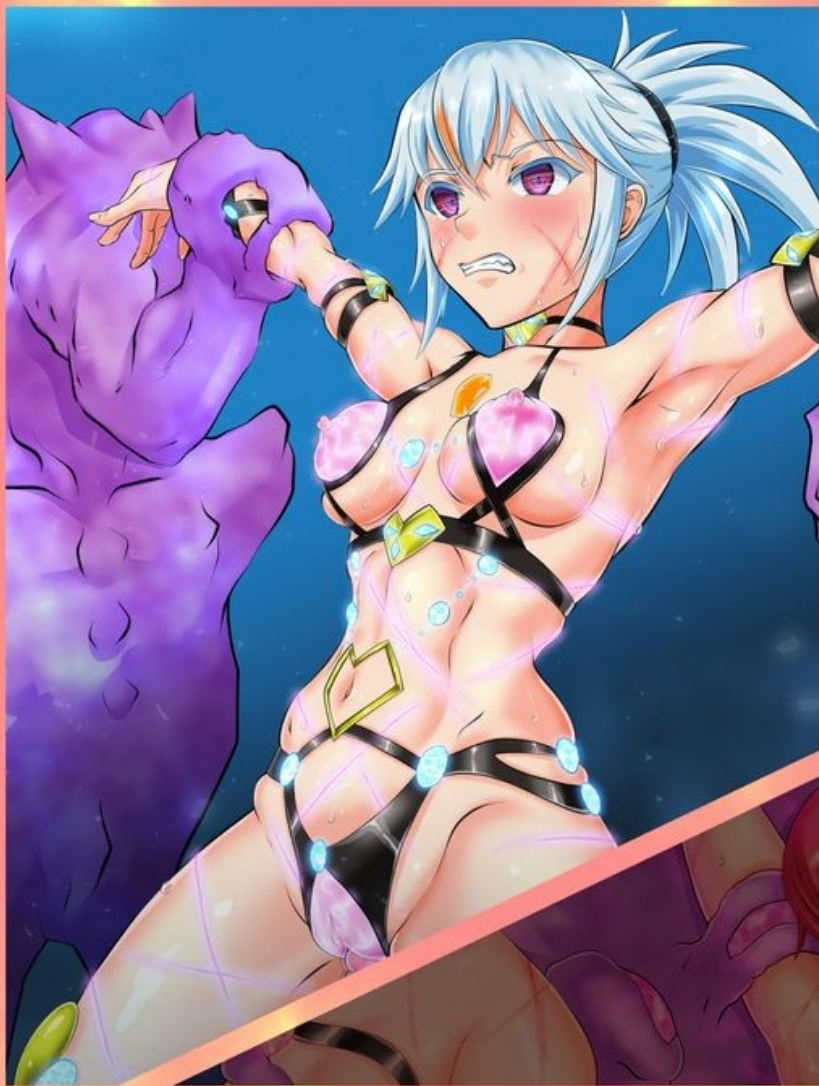




「へえ、貴方の能力、とってもすごいねえ。」

「ホント!?!褒めてくれたの
お姉ちゃん以外だと
エレジアさんが初めてだよ!。」

豪華に飾られた、とある場所にある一室、そこに少女が1人立っている。

少女は服を纏っていないが、体中に不思議な形のベルトがいくつも巻きつき、それが大事な部分をしっかりと隠している。中には宙に浮くベルト等もあるが、それは中に浮いてはいるわけではなく少女の体の所々が透明か半透明になっているからだ。

クリステッラ

それが中級マーゴである彼女の名前だった、そんな彼女は目の前に浮く黒い靄が固まったような物に話しかけると、靄からも声が聞こえる、中に誰がいるようだがその姿は確認できない。

『それで、クリステッラちゃんはマーゴハンターに復讐がしたいのね。』

その声音から女性と思われるエレジアと呼ばれた者は靄の中から優し気にクリステッラに話かける。

『うん、あいつら、わたしのお姉ちゃんを……元は同じマーゴハンターだったはずなのに……くそ……』

「わかるわあ、あいつら野蛮なのよね。身勝手というか、私も大嫌いよ。」

でも貴方の能力なら私の所に来る必要は無いのではなくて?。」

「うん、わたしの力は効果が出るまで時間がかかるんだ、いっしょにはお姉ちゃんに助けをもらってただけで...。」

「エラピユリス、いい娘だったわよね。」

「うん、だからエレシアさんの力を貸して欲しいんだ...あ、えっと力を貸して下さい、お願いします。」

「フフ、急に畏まらなくてもいいわよ、まあきちんとお代も頂けるみたいだし、

私、貴方のそういう所好きよ。」

「あ、えへへ...ありがとう。」

「貴方に相応しい百鬼夜行...これかしらね。」

黒い靄の中からパチンと指を鳴らすと
クリステッラの前に
大きな火の玉、鬼火が現れる。

「貴方の要望にはこの
切二(きりいち)が相応しいわね。」

鬼火が膨れ上がり霧散すると、そこから
肉塊を無理矢理まとめて人型にしたような、
身の丈3m近い大男が姿を現す。

「うわあゝすつご。」

クリステッラその大男を見上げ感嘆の声を漏らす。
目隠しのようにベルトが巻かれ
視界が塞がれているのだから、
まるで目があるかのように
切二の方を見上げる。

「切二は体から手や口等の特定の部位を
無数に生み出す事ができるわ。」

但し使ってる最中に生み出せるのは1種類だけ、
別の部位を使いたかつたら、
一度全部引つ込めて頂戴。それと」

肉塊が真ん中から裂け、
裂けた肉がまとまり、人型を形成する。

「さうやって分裂させる事も出来るわ、
ただ当然力は半減するから
分けるなら2体くらいにしておきなさい。」

「あの…エレジアさん、これ、もう二体欲しいんだけど、ダメかな?。」

「?…いいわよ?、
…という事はある程度何をするかは決めてるのね
…相手の目星はついてるのかしら?。」

「うん、色々と情報を教えてくれる
人間を見つけたからね。」

「へえ、どういう作戦なのかしら?。」

「えへへ、秘密。」

無邪気な笑顔を浮かべるクリステッラの要望に
露の向こうのエレジアは何かを察じたのか、
大きい鬼火がもう一つ現れ肉塊がもう二体現れる。



「じゃあこれに触れて。」

黒い靄の中から鉄の板が6枚飛び出し、
2枚がクリステッラの元に飛んでくる、
クリステッラがそれに触れると、
板の上に紋様が浮かぶ、
紋様の浮かんだ板はクリステッラの元を離れると、
各3枚ずつが2体の肉塊の中に埋まっていく。

「これで切二は貴方の命令に従うわよ、
頭の中でやらせたい事を考えればいいわよ、
やつてごらんさい。」

「はい。」

「言われたクリステッラは黙り込む、
すると切二が交互に万歳をし始める。」

「おおっ—すげー。」

「ぷっ…あはは、面白い事するのね、んふふふっ!」

堪えきれず吹き出すエレジア、
不気味な肉塊が交互に万歳している
姿がツボに入ってしまったらしい。
当のクリステッラは
エレジアの笑い声を気にするでもなく
真剣な表情で切一の操作を続けている。

「ん~~~~うりゃっ!、ほっ!」

「あっはははっ!、
んふっ、んふっふふふふっ!」

雷の中からの笑い声が響き、
それを意に介さず
真剣な表情で肉塊を躍らせる少女、
豪華な部屋の中で
なんとも奇妙な光景が展開されていた。

「うん、これでやってやります、ありがとうございます、エレジアさん、……?……じゃあ……」

それからしばらくして
切二を動かし続け
ある程度ユツをつかんだクリステッラ。

エレジアが未だに笑っているのを不思議に思ったが、
邪魔をしてはいけないのかなと勘違いし、
エレジアに礼をして出ていこうとすると。

「はー面白かった、ああ、ちよつと待ちなさいな。」

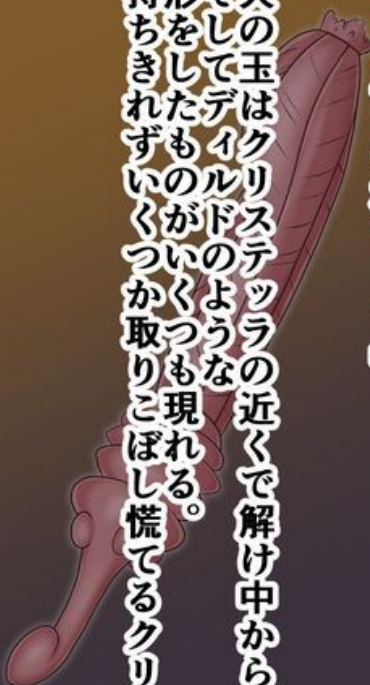
「?。」

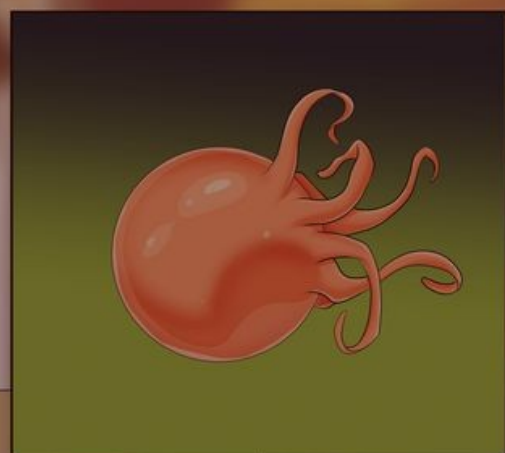
再び靄の中から指をパチンと鳴らす音がすると、
クリステッラの前に先程よりも
小さい火の玉が複数生まれる。

「笑わしてくれたお礼にこれもあげるわ、手を出して。」

「はい……つて、うわっ!?!」

火の玉はクリステッラの近くで解け中から鞭や玉、
そしてデイルドのような
形をしたものがいくつも現れる。
持ちきれずいくつか取りこぼし慌てるクリステッラ。





「マカゼ鞭、朱玉、ぬず棒と……
全部説明するのも面倒ね……」

「……ねえクリステッラ、
復讐が終わったら私の所に来ない?。」



「ええっ!? エレジアさんの所に! ほ、ほんとに!?!」

クリステッラは以前から姉と共に何度もエレジアと関わっており、実は密かに憧れを抱いていたのだ、

そんな憧れのエレジアからの申し出に驚くクリステッラ。

「貴方、とても可愛いし能力も素晴らしい、私の傍に置くには申し分ないわ。」

「えへへ、可愛いとかお姉ちゃんしか言ってくれなかったよ…嬉しい…」

うん、これが終わったらエレジアさんのお手伝いさせてほしい!」

「フフ、いいお返事ね、じゃあ貴方の体の二部、分けてくれる?。」

黒い靄からまた鉄の板がクリステッラの元に飛んでくる。

「いいけど、なんで?。」

「帰ってきたら貴方の力を強化してあげる、その為に必要な事よ、さあその術鋼に触れて頂戴?。」

「はーい、…んんわあっ!!」

浮かぶ鉄の板、術鋼を掴むクリステッラ、
途端にバチッと電気が走り、
素っ頓狂な声を上げる。

「これで完了よ、ありがとう、

どう?今あげた死鬼具の使い方、
全部分かったんじゃない?」

「…あ、ほんとだ、なんで?」

言われクリステッラは貰った全ての死鬼具の
名前、使い方、全ての理解できていた。

「ふふ、そういう術なのよ、
じゃあ行つてらっしゃい、頑張つてね。」

「うん、行つてきます!」



「ふーん」



「No...」



「ふん、やっぱり小物でもマァゴハンターだね、
我慢強いや。」

あるビルでのマーゴの調査、

レントにとつてはいつもの任務、
同じクラスのマーゴハンター達と
手分けして調査していた。

その最中、
レントに同行していたマーゴらしきものを
見かけたという
建物の清掃員に何か動いていると言われ、
その場所を確認しようとした、

その時、
清掃員に後ろから突き飛ばされ、
レントは特殊な形状をした
ダストシュートの様な場所に落とされてしまう。

「ふんっ。」

幸いというか当然というか
マーゴハンターの身体能力をもってすれば、
不意を突かれたとはいえない
ちよつとした高さから落とされた程度で
怪我する筈も無く
落ちたダストシュートの先で
華麗な着地をしたレント。

「……。」

清掃員の事は一旦置いておいて
仲間との合流方法を考えていると、
背後から肉塊状の怪物からの奇襲を受けた。

「はあっ!」

レントの二太刀が肉塊の腕を切り飛ばす、しかし肉塊は瞬時に腕を再生し襲いかかってくる。

「これでっ…えっ!」

何度目かの肉塊の攻撃に対してランゲアを展開し對抗しようとしたその時、背後から紐の塊のようなものが、レントの背中にくっついたかと思うと、それは瞬時にレントの身体に絡みついた。

「なにっ…これ!」

全身に絡みついたベルトの様なものを咄嗟に引きちぎろうとするレントだが、ベルトは丈夫で千切れる気配すらない。

「くそっ…このままやるしかないか!」

レントはベルトの解除よりも迫る肉塊への対処を優先し、肉塊へ相対する。

「……ふう……」

あれから30分経つただろうか。
肉塊からの攻撃は今も続いていて、
決して俊敏では無い為、
簡単に捕まる事は無い。
だがレントの攻撃を何度受けても肉塊は再生し
襲い掛かってくる。

「どうしてマー『じゃないのかな?』」

マーゴだったなら既に
致命傷の攻撃を繰り返しているにも関わらず
倒れる事の無い肉塊に疑問を抱くレント、
有効な打開策を模索しつつ、
再びランゲアを展開し、
攻撃しようとしたその時。

「……えっ!?!」

カランという音をたて
ランゲアが地面に転がる。
肉塊の突進を咄嗟に回避したレントは、
再びランゲアを向かわせようとするが、

「なんで?、動かない!?!」

全てのランゲアがレントの命令に反応しない、
その動揺が一瞬の隙を生んだ。

「きやつーく……」

肉塊を避けて飛び上がった後の着地のタイミングに合わせるように肉塊がレントの左足にしがみついてくる。

「インディウから……まさか!？」

さっきまでいなかったはずの敵の襲撃、よく見ると左足にしがみついている肉塊は上半身だけだった。

「んっ、あつっ。」

取り外そうとイドラケアを振りかぶったレントの背中に新たな上半身だけの肉塊が飛び掛かり振りかぶった方の腕にしがみつく。

「私が切り落とした部分が……再生したの……!？」

先程まで切り飛ばした肉塊の一部、それが個々で再生している、そう考えたレント、その予想は正解で、周りを見ると散らばった肉塊がそれぞれに蠢き、自分にしがみついている肉塊の上半身のような形状を成しつつあった。

「マズイ……!?!」

状況の悪さに動揺する
レントの右足にも肉塊がしがみつくと、
取り払おうと力を込めるレントだが。

「くそっ……しまった、あぐうううう……!」

それに集中してしまった故に目の前に迫る
肉塊への対応が遅れ、
突進をまともに受けてしまった。

「ぐぐそっ…離せ!」

レントを捕らえた肉塊達は獲物目掛け集まり、まとまると、レントの手足を取り込みような形になる。

肉塊の拘束は解こうと抵抗するでレントだが力いっばい暴れても解けそうに無い程拘束は強固なものだった。

「やぐった、つつかまえた!」

「!?!」

闇の向こうから鈴を転がすような可愛らしい声が聞こえる。

いや、それにしても近い場所から声が聞こえる、よく見れば空間が歪んでおり、それが次第に像を結んでいくと、奇妙な恰好をした少女が姿を現した。

「お前、何者だっ!」

「何者って見ての通りのマーゴだよ、クリステッラっていうんだ、よろしくね、えぐっとレントちゃんだっけ?」

「うー!?!」

「なっ！……ん。」

「あつはは、動揺しすぎ、無理矢理隠しても無理だよ。」

「…なんで、お前がそんな事を知ってる?。」

レントは努めて冷静に
マイゴ睨みつけ情報を探ろうとした。

「マイゴハンターって存在が秘密にされてるんでしょ、でも中にはその情報をお金を出せば教えてくれる奴もいるんだよね。」

「それは…。」

ピシィッ！

「ぐうっ!。」

クリステッラの手に持たれた鞭が
レントの言葉を遮るように振るわれる。

「まあ細かい話をおまえが知る必要はないんだよ、おまえは餌なんだからさ。」

「はあ……はあ……」

あれから何度も鞭を振るわれたレント、
全身は痛々しいミミズ腫れに彩られ、
服は全てもしり取られ、まどわりついたベルトは
形を変えボンテージのようになっていた。

「いい格好になったね、ふふふ、どう？降参する？」

「……はっ……冗談。」

レントはクリステッラの挑発を鼻で笑う、

その目には曇りは一切無く、
これまでのダメージを感じさせない程だった。

実際、レントは痛みには昔から強かったりする、
日々の訓練やアイシヤとの模擬戦等と比べれば、
この程度大した事はないのである。

「ふうん、力も使えないそんな状態で
よくそんな態度でいられるね。」

だがそれよりも大きな問題が2つ、
レントを窮地に追い詰めていた。

「…ダメだ、力が全然使えない、エネルギーを吸われてるわけじゃないのに…。」

「なんで、力が使えないのよ…?。」

「ん、そんなの教えてあげるわけじゃないじゃん、まあわたしの能力なんだからどね♪。」

ビクッ!

試しにレントは自分に起こっている事を問うてみる。

するとクリステッラは自分の能力に絶対の自信があるのか、それとも調子に乗るとボロを出すタイプなのか、あつまり能力が原因である事を暴露してしまう。

確かにこのベルトを巻かれ暫く経つてからランゲアが使えなくなつた事を考えると、このベルトに何かの能力が付与されているのは想像できた。

しかし、エネルギーを吸い取られた感覚も無く、むしろ今は完全に回復し満タンの状態だ、だが何故が使う事が出来ない事にレントは困惑する。

「んっ……んっ……」

「もう鞭で出来た傷が塞がってるう
流石♪
さて、じゃあまたアレやるっか?。」

「……!?、だっ、それ……やめっ!。」

「やっだ♪。」

そう言っつてクリステッラは
手に持つ鞭に力を込めると、
柄部分が桃紫色に発光する。





「!?…んぐっ…あぐ、んんんんん！。」



「ぐううううう！♡♡♡はっ…
あぁっ！くうううううう！♡♡♡！」

『そうだった、じゃあやり方を変えないとね。』

そういうとレントを捕らえた肉塊が
レントを捕らえたまま形を変え始めた

『あ、これも外しておこうかな。』

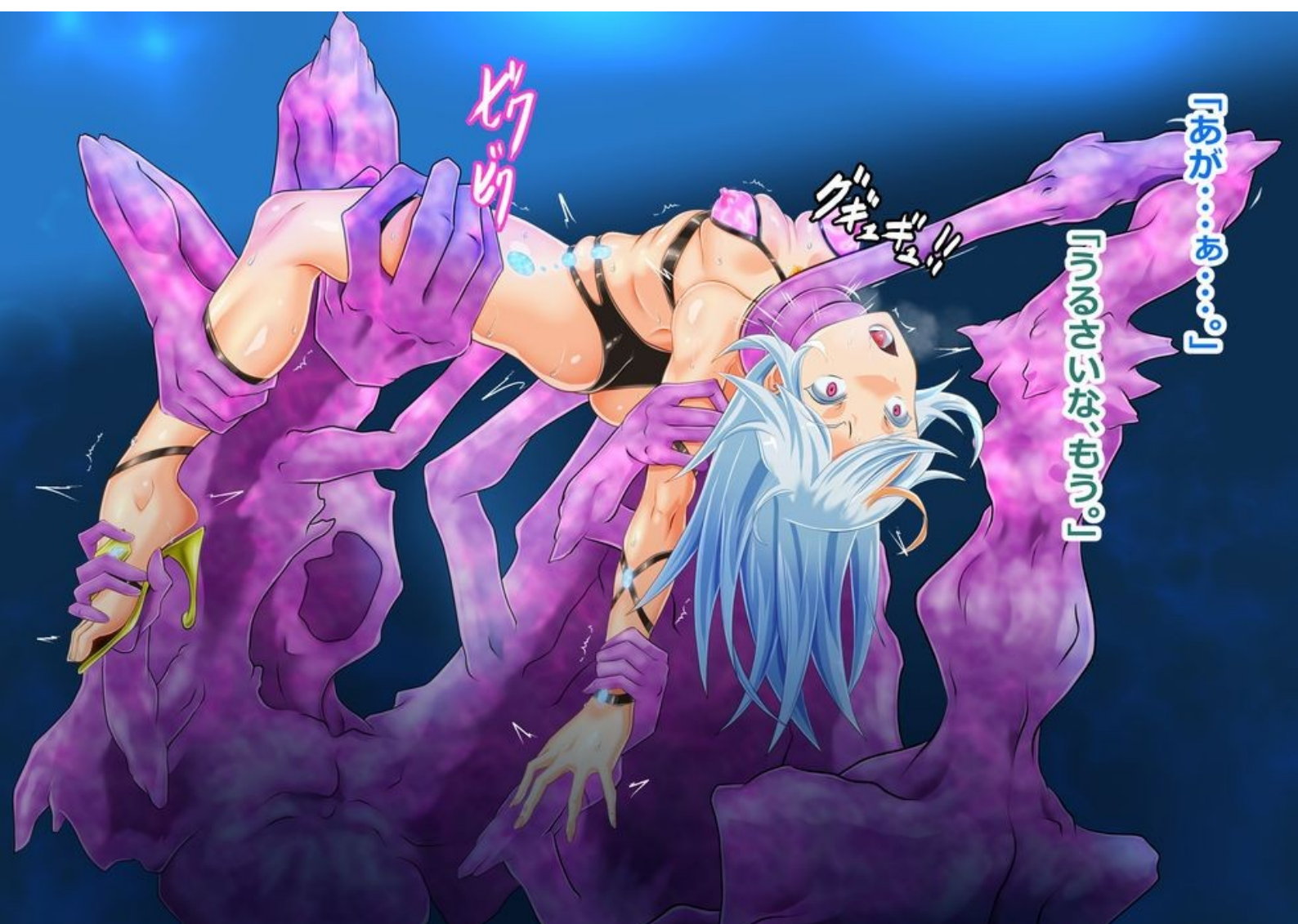
何かに気付いたクリステッラは
レントの髪飾りに触れようとすると。

『!...やめろ、それに触るな!。』

『おっと、おや、急に慌ててどうしたの？、
何か秘密があるの？
それとも大事なモノ?。』

急に血相を変えたレントに
何かがあると察したクリステッラは
切二に髪飾りを取り外させる。

『やめろ!、くそっ、返せよっ!。』



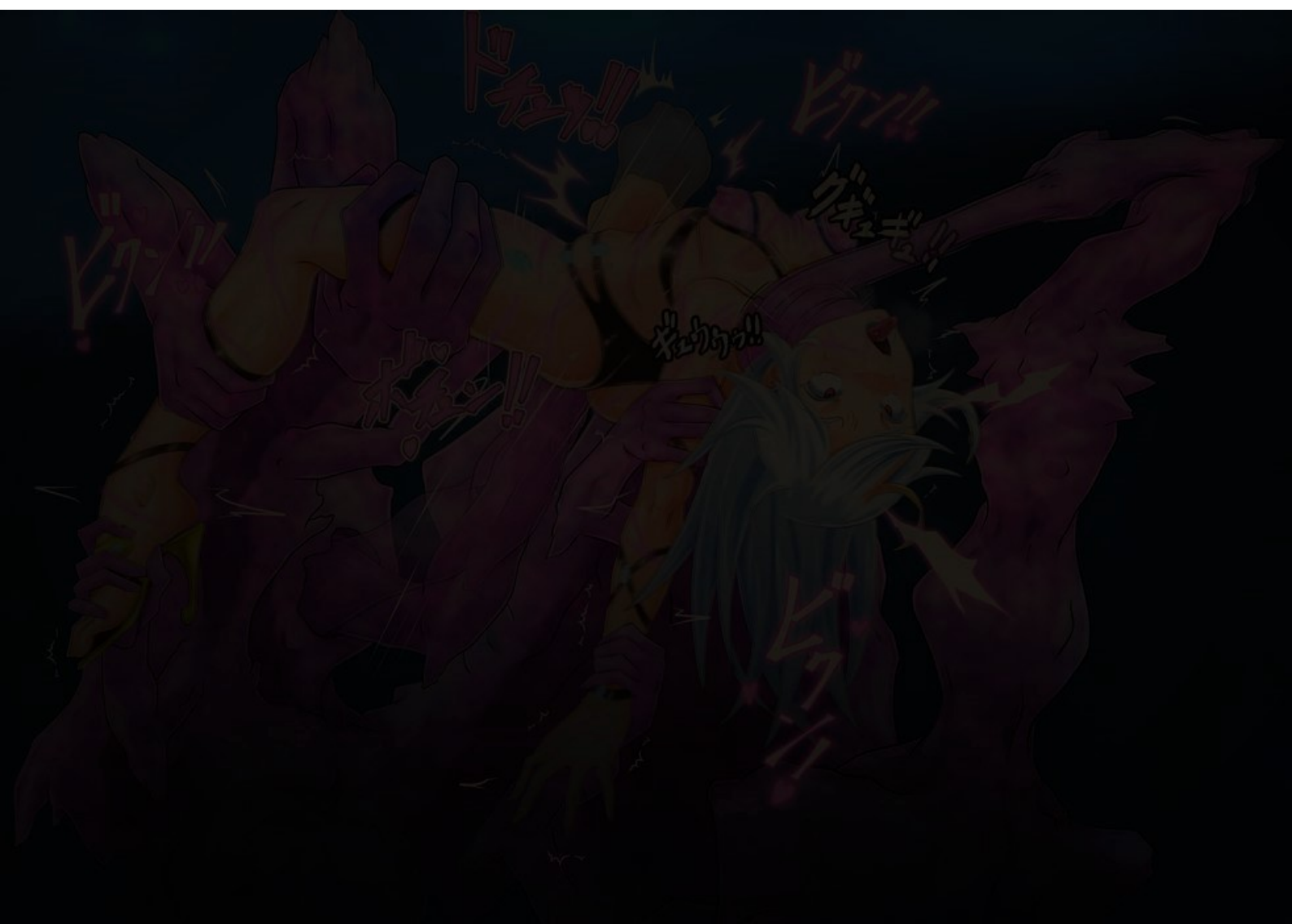




ボイッ!!

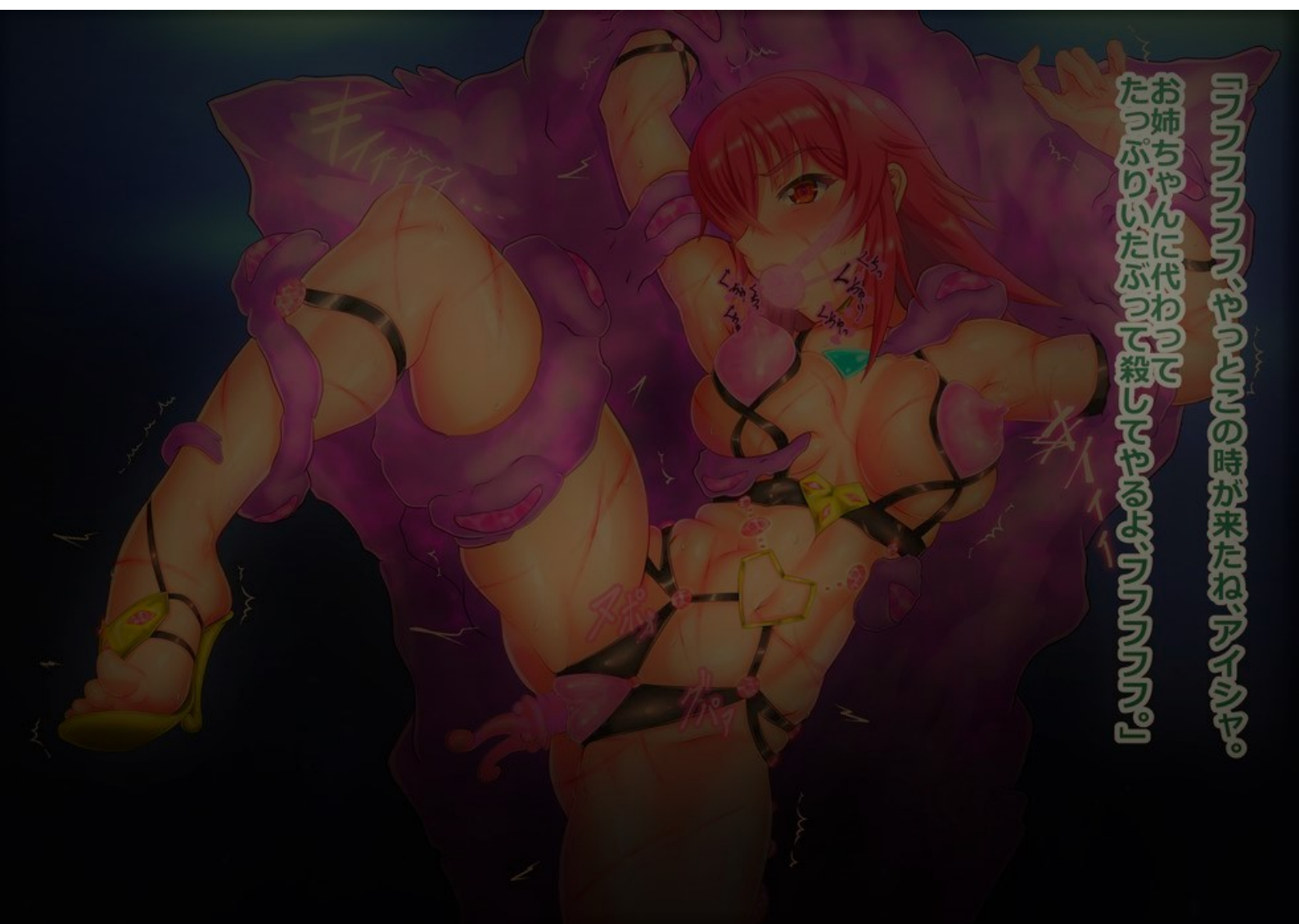
「あがががっ!!」

「おおおおっ!!」



2日後

「フフフフフ、やっとこの時が来たね、アイシヤ。
お姉ちゃんに代わって
たっぷりいたぶって殺してやるよ、フフフフフ。」









レントがある任務の後、消息を絶った。

行方を探すアイシャ達だったが、その前に情報屋を名乗る人間が現れ、ある場所にアイシャ1人で行くように指示される。

時間も決められていて、しかも短時間だった為、ろくな準備もしないまま、その場所に乗り込んだアイシャ。

そこにはマーゴ、クリステッラが待ち受けていた。

肝心のレントは別の部屋にいて、自分に手を出せば命は無いと言われ、選択の余地のないアイシャはクリステッラの命令で、アニマウエポンを解除し全裸になる。

クリステッラはアイシャの体に生み出したベルト状の触手が絡みつけると、特殊なボンテージの様な形になる。

更に肉塊の様な生物、切二でアイシャを拘束し、無防備になったアイシャの体にマカゼ鞭という傷が快感を発生させる特殊な鞭を振る拷問を楽しむ始めた。

今は鞭打ちもひと段落したが、蕩け加減が足りないと切二から淫気の光を纏わせた触手を出させ、アイシャの体を這い回らせる。その光は直接的な威力はないものの、マカゼ鞭によつて付けられた傷や膣内で蠢くぬづ棒、口を塞ぐ朱玉と反応し、様々な角度からアイシャの体を快感でつゆつくりと煮詰めていた。

「ふっ…ふ…」

（さて…レンをどうやって助けよう…。）

クリステッラの暴力はダメージはあるものの、耐えきれないものではない。なのでアイシャは状況を冷静に分析する。

ここに来てまだレントの姿は見えていない、だがマールゴの態度からこの建物内にレントがいる事は間違いないだろう。そして自分の弟子であれば、きつと何かしら足掻いているだろう、出来ればそれが分かるさっかけがあれば、自分も動けるのだが…

今は耐えるしかない、アイシャは内心そう思いながらその時を待つが、実はもう一つ問題があった。

（この力が繋がらない感じ、あいつの能力か。）

チャンスを伺う為にも常に自分の状態には気を配っていたが、ある時から自分の力が上手く流れていない事に気付く、

実は鞭を受ける時もダメージを減らす為に薄くバリアを張っていたのだが、気付くと全く張れなくなっていた、それ以降自分の力の流れがおかしく、繋がらない奇妙な感覚に襲われていた。

(少しは隠せたから、なんとかなるかな。)

そんな中だがアイシャはエネルギーの一部を
体の中に囲い残していた、
どうやらマーゴもその事に気付いていないらしく、
今の状況でもいざとなれば
この拘束を解きマーゴを倒すくらいは
してやるつもりだった。

(でもこの地図があるとはね、あたしって運がいい。)

アイシャが部屋の隅に貼られていた地図に目を向ける、
どうやらこの施設の間取り図のようで薄汚れているが、
それを見るとこの施設は入る時には分からなかったが、
地下4フロア分もある大きなものだったらしい。

地上は1階しかなかったもので
レントがいるとすればこの地下フロアの
何処かだろう、
アイシャは快感に悶えるフリをしながら
地図を確認しつつどこにレントがいても
迅速に助けに迎えるルートを
模索し続けていた。



「あ、エレジアさん。」

突然クリステッラはそう呟くと懐からお札を取り出す。どうやらそれは連絡用の術が込められた札だったらしく、札の向こうの誰かと親し気に話始める。

「はい、うまくやってます、え？、ああなるほど……。」

内容をアイシャに聞かれたくないのか部屋の隅の方へ行き会話を続けるクリステッラ。

「はい、人質ですが、え……と
4118ですね、当然逃がしてませんよ。」

（やっぱり一番奥か！）

アイシャは彼女の会話から情報を得られないかと聞き耳を立てる。

そして小声だったがアイシャは人質の部屋の番号を確かに聞いた。

ここから一番遠い部屋だが、それは想定済みである、ならば今こそ動く時だと、隠した力を開放しようとしたその時。

アイシャの正面に置かれたテレビの画面が点灯する、そこに写ったものは……

「……」

「……」



「エレシアさん、やっぱりでした、
ありがとうございます。」

クリステッラが札をしまいつつアイシヤの元にやってくる。

「きつと力を隠してるからつて言われたけど本当だったね。
どうする？、私を殺して助けに行く？、部屋的位置は本当だよ、
でも間に合わなかったらあの子の脳みそグチャグチャになって爆発
するけど、それでもやる？」

画面の中のレントは見るも無残な姿で犯されている。
凄まじい太さの肉棒はお腹を歪められ、
更には耳に細い触手が大量に侵入し、
まるで太い肉棒のようになつたそれが
激しく出し入れされていた。

「あんたが助けに来るのが遅いからそろそろ三日目くらいかな？
ずっとあんな感じだよ、耳が弱いからつていじめ過ぎちゃった。
鼓膜はビリビリだけど脳みそは無事だしちゃんと生きてるよ、
でもマハゴハシタⅡつて頭吹き飛ばされても生きれるもんなの？
クスクスクス。」

クリステッラの邪悪な笑みに
殺意と怒りを込め睨みつけるアイシヤ。

「ふふふ、こつわいい、じゃあ隠してた力も没収ううう。」

ボンテージの各所のクリスタルが強く発光すると、レントのあの状態を見せられ、抵抗する術を失ったアイシャの体から、隠していた力さえも繋がりが断たれる。

「私の力ってね、自分の空間に好きなものをしまえるんだ、今はお前のエネルギーをしまつちやつたの、だからいくら何かしようと思つてもそれの着ている限り、わたしが許可しないとなんた達は自分のエネルギー、そのものを使う事が出来ないんだよ。」



「は〜っいい〜っに2枚の札があります。」

憎き相手を絶望させ気分の良くなったクリステッラがアイシヤの眼前に2枚の札をちらつかせる。

「この札は感覚共有の札っていったね、簡単にいうとあんたの感覚があの子に、あんたの感覚があの子につて具合に感覚が共有される術が込められてるのよ、

それ・で・ねー。
あの子、もうヤバそうじゃん、勿論人質を殺すつもりはないけど、今の状態であんたの感覚まで請け負えるかな〜。」

「U...」

「そう睨まないの、でね、私はあんたをいたぶればそれでいいの、だから、この札を両方あんたに貼るつてのはいいの、そうすると相互の感覚が重なって4倍以上の感覚があんたに集中するんだけど、あつちの子が受けてる感覚は無くなるの、

どうかな？
もし2枚貼つていいなら首を縦に、嫌なら横に振つて答えてね。」

「V7 V7 V7」

「ズッ
パッ
パッ」



レントの状況は明確に分らないがこれ以上過度な刺激を受け続けて良い事などない、いくら相当な重傷を負っても回復するまいゴハンターでも頭を破壊されても生還した話などあるらしいが噂話レベルのものだ。そんなものに賭けるほどアイシヤは無謀ではない。

初めから選択肢など無い選択に口を塞がれたアイシヤは即座に首を縦に振る。

「だ、よね、良かったね、実はもうあの子にパスを通してやるからもし嫌って答えて札を張つたらあの子に4倍の感覚が行くところだったよ、さっすが、

それじゃあ えい♪。」

2枚の札を重ねアイシヤの胸の間に張り付ける。すると札の文字が発光し始め紙の部分が消滅、残った文字がアイシヤの体に根を張るように伸び絡みついていく。





「ぐうっ……い、ぐうっ……ううう。」

「あつははっ！、キツそうだね。」

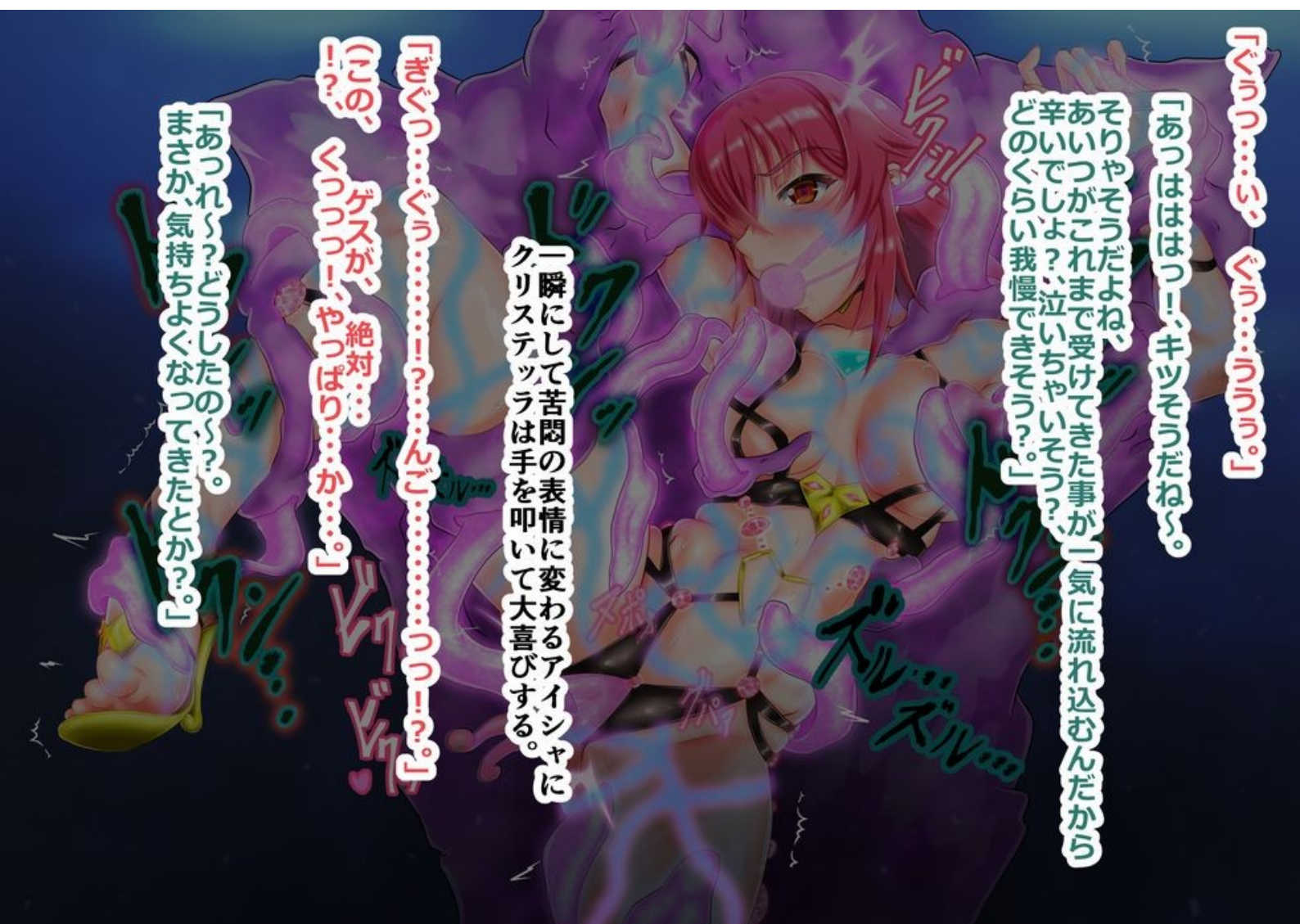
「そりゃそうだよ、あいつがこれまで受けてきた事が一気に流れ込むんだから辛いでしょ？、泣いちゃいそう？、どのくらい我慢できそう？」

「一瞬にして苦悶の表情に変わるアイシヤにクリステッラは手を叩いて大喜びする。」

「ぎゅっ……ぐう……！？……んご……っつー？。」

「（この、ゲスが、絶対……！？、くっつっ！、やつぱり……か……。）」

「あつれ？どうしたの？。まさか、気持ちよくなってきたとか？」



「ぐぐう…んっ！…ぐぐう…ぐぐう…」

アイシヤは体中で発生する痛み、独特の甘い痺れが混じり始めるのを感じる。そしてそれを知っているかのようなクリステッラの残酷な笑みに、これが仕組まれたものだとして理解する。

「痛みと快感で紙一重のものらしいからね、ここから更に淫気注ぎ込んでやるよ、あいつも最初は耐えてたけど途中から無様に喘いじやつてイキまくりだつたけど、あんたはどうかな？」

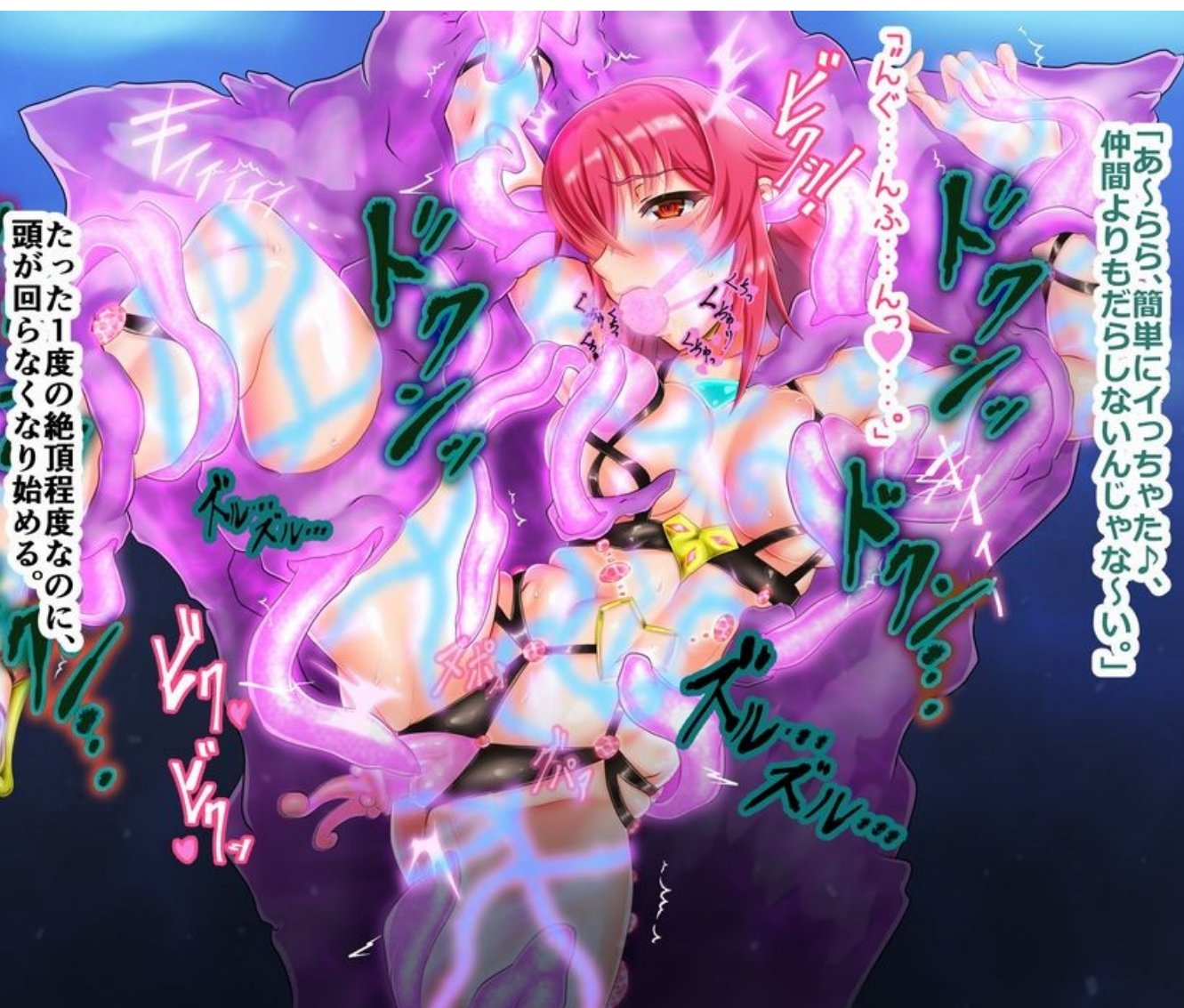
「ぐぐうっ！…んぐ…んおあ…つつ！…。」

体中を這い回る舌の淫気が強くなる。強靱なマリゴハンターの体は痛みには非常に強いが、全く平気というわけでは当然ない。

その痛み甘い快楽を混ぜ合わせられてしまえば、どちらに対応すべきか体が判断出来なくなってしまう。

そうなる事に抗おうとするアイシヤだが、送り込まれる甘い痺れの侵食は容赦なく体を蹂躞していく。

「あ〜うら、簡単にイっちゃたよ、仲間よりもだらしがないんじゃない。」



たった1度の絶頂程度なのに、頭が回らなくなり始める。体中の常人であれば耐えられないような苛烈な痛みという鞭に快楽という飴を混ぜられた事で苦痛と快楽がごちゃ混ぜになりそれがアイシヤの強靱な意思を急速に解かじていた。

「んあぐう!、は…あ…。」

アイシヤは四肢をがっちりと掴まれ
宙に大の字に固定される、
そして開きっぱなしの秘穴に
野太い肉の塔があてられる。

その太さはレントを責め立てる肉塔よりも太く、
緩んだ穴よりも遥かに太いものだった。

「があつ…あぐあ…や…め…。」

グリグリと押し付けられていたそれが
ミリミリという音と共に
無理矢理アイシヤの淫孔を広げながら
突き進んでくる、

その圧痛に蕩けかけた意識が呼び起こされた
アイシヤは制止の声を上げる。

肉塔はそんな彼女を嘆願を聞いたかのように
一瞬止まるが、そこから勢いよく肉塔が突き込まれた――。

「お……おごおつ!!」

ガッガッ

ズズズ

ハッハッ



「!?」
「ふっ……はうあ♡……は♡……ひ……」

触手の先端から無数の細触手が生まれアイシヤの耳に群がる、
するとアイシヤの口から困惑の混じった甘い声が漏れる。
触手は耳の至る部分にまわりつき、先程までの暴力的な行為とは真逆の
繊細な刺激を与え始めた。



「そうそう、これこれ、いい感じじゃない♪。」

「あーあ……ひっ♡ひああ♡」

《……ひ♡ひ……》

耳への快感に蕩け始めたアイシャに肉塔の一撃が再び見舞われ、先程まで只全てが苦痛だったストロークに対して反応するアイシャの声に甘い響きが混じる。

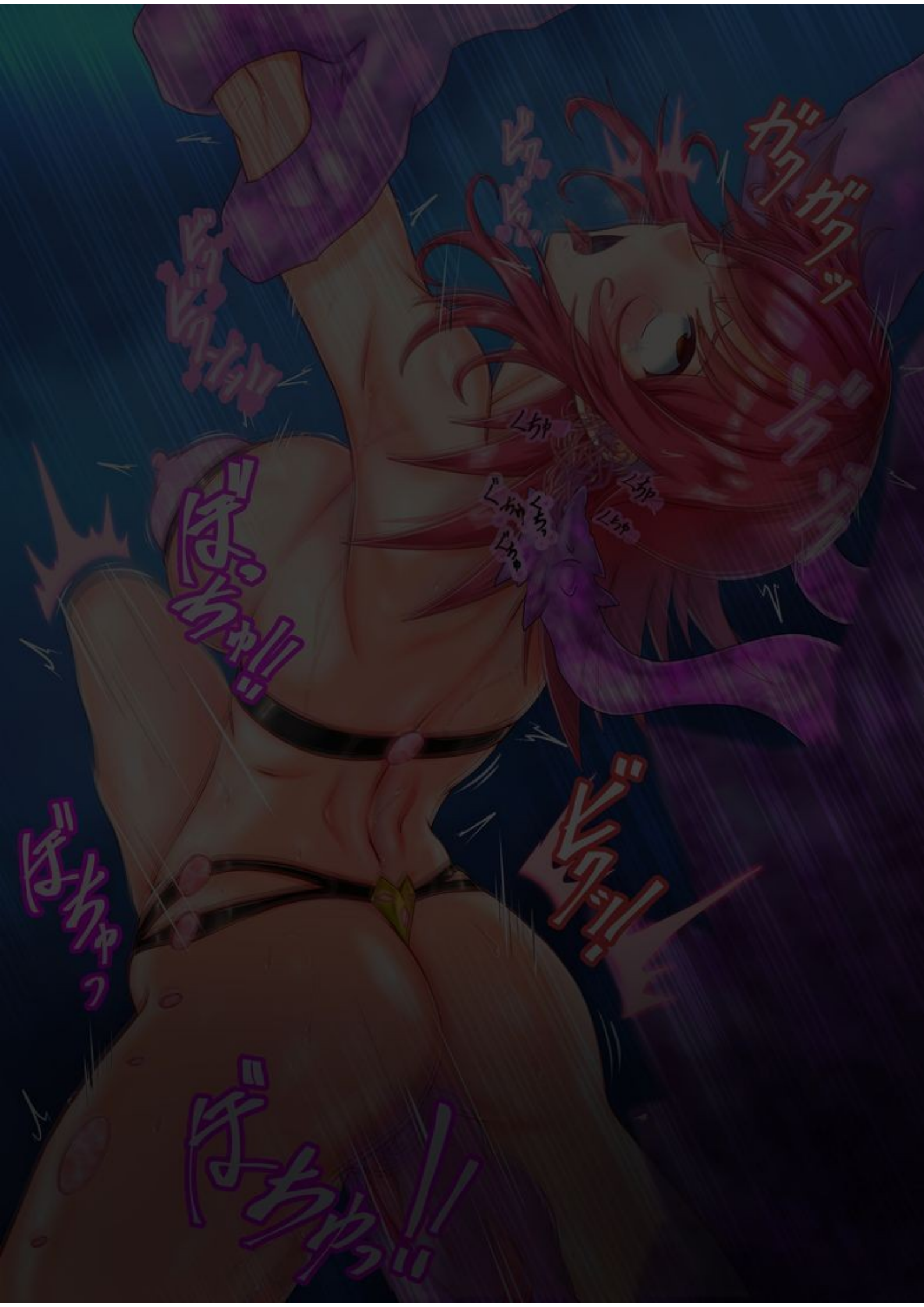
求めていた反応に満足げなクリステッラはさらに耳を責める触手の本数を増やす。

頭の近くから送り込まれる快感とこれまで体中に沁み込まされた数々の快楽効果を持つ術が絡み合い、本来ならば快楽を一蹴する程の苦痛を快感として受け入れてしまう誤作動がアイシャの体で起き始め――

「ばちゅ!!」

「ばちゅ!!」

「ばちゅ!!」





「ふっふっふ、苦しい？、
それともそんな状態で気持ちいい？、
もちろん両方だよね？」

「あ……が、は……♡♡」

クリステッラの嘲笑に反論の声すら上げられないアイシヤ。
いくら強靱な肉体を持ったマッゴハンタリといえど、
内臓をかき混ぜられ続ける苦痛を与えられて
余裕というわけにはいかない。

しかも今は能力も奪われた状態で感覚と体を狂わされ、
更にはレントの与えられている苦痛と快楽を二身に受けているのだ。

繰り返される淫虐に最早堪えているのかただ流されているのか
アイシヤ自身も分からない状態だった。

「そろそろクライマックスかな。」

そう呟くクリステッラの両手に昆虫の繭のようなものが現れる。

「さあ、合体しな——！」

クリステッラが2つの繭を放ると肉塊はその繭を飲み込み、
アイシヤを捕らえたままにその形を変え
新たな拘束形態を形成していく。

「衆業苦、かゝんせい。」



切一が最終形態、衆業苦（しゅうごうぐ）。

この形態はそれまでに使っていた死鬼具を取り込み、捕らえた対象にトドメを刺す処刑装置である。

取り込んだ繭の1つはクリステッラの思考や感情が詰まっており彼女が望む形を作り出し、もう一つの繭は取り込んだ死鬼具をまとめあげる繋ぎであり要となる。

今回作り上げられたものは肉塊で形成された十字架、そしてそれに捕らわれたアイシヤの周りには中心が発光するぶよぶよした袋を持つ浮遊物体が6体出現した。

また、先程までボコボコに膨らまされていたアイシヤのお腹は元の引き締まったお腹に戻っている。ぬづ棒の効果は人間の体を軟化させるが術的に変化させているので何もしなければ元に戻るのだ。

変形の際に触手が引き抜かれた事でお腹も元に戻り内臓をかき混ぜられる苦痛が無くなり少しだけアイシヤの意識が戻り始めるが衆業苦は構う事無く刑の執行準備を始める。

その肉の十字架のアイシヤを拘束する箇所、
その内部から極小の針が生まれアイシヤの皮膚を貫く。

いつものアイシヤであれば無意識下でも張られているバリアで
多少の抵抗が出来るのだが、
クリステツラの能力でマーゴハンタリの力を奪われた
体に難無く侵入した針はアイシヤの血管内に薬液を注入し始め、
謎の液体を点滴されるアイシヤの口からは呻きが漏れる。



「もういいね、じゃあ、始めようかな。」

薬液がある程度注がれた事を確認したクリステッラが念じると
浮遊する物体の中心に紫色の光が灯り、下側から細い触手が
伸びアイシャの乳首とクリトリスに絡みつく。

「んっっっっ」

うっっっっっ♡

んっっっっ

細いながらもその表面は細かい毛のような物がびっしりと生えており、
軽いチクチクとした感触があるだけなのだが、
感覚を増幅された状態での敏感な部分に取り付けられる刺激に
アイシャの口から思わず甘い声がもれてしまう。



『スパーク♪』



『………』

『………』



「んがああっ!!
あああっ!!……っ!!」

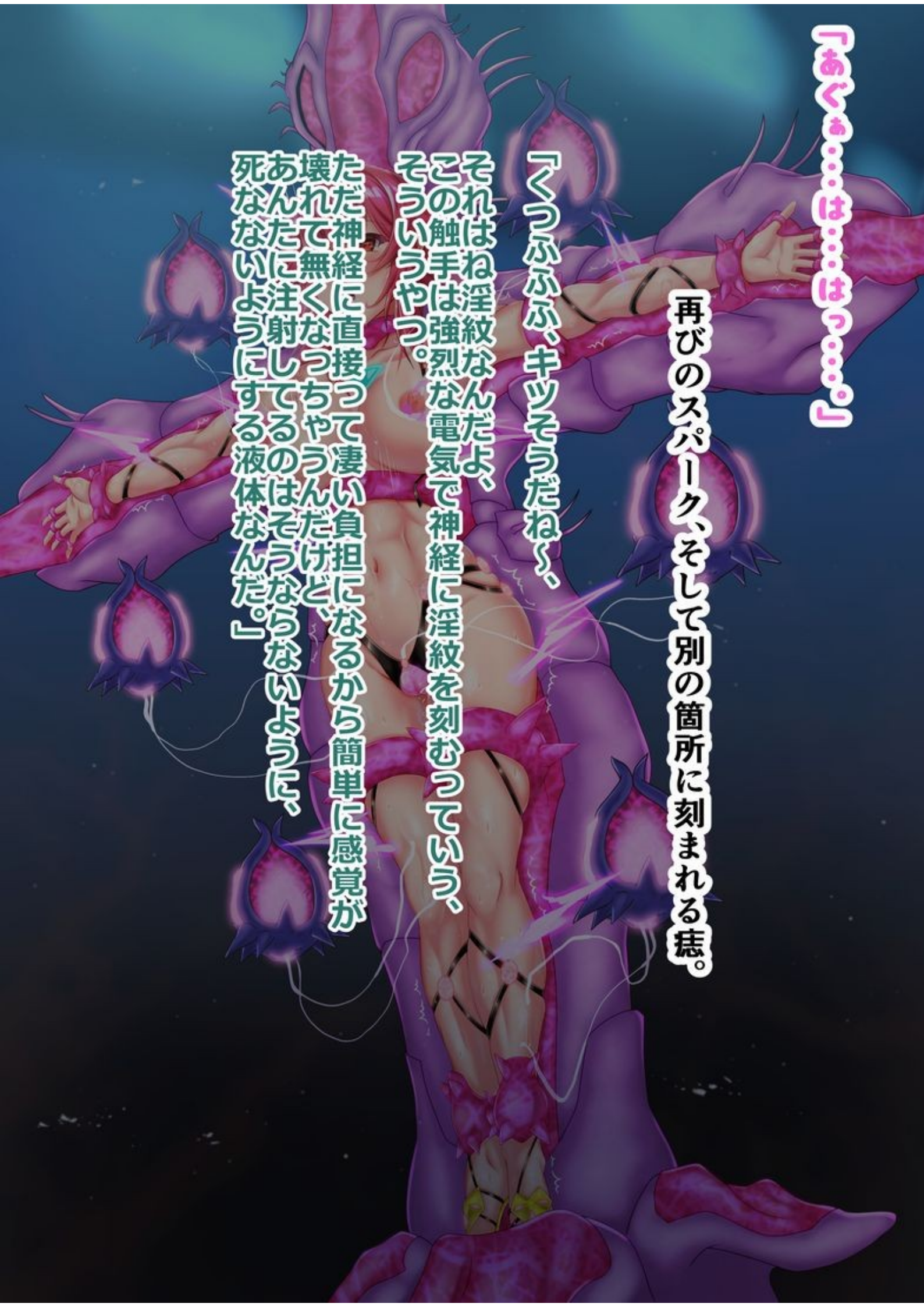
「あぐあ……は……はっ……」

再びのスパーク、そして別の箇所刻まれる痣。

「くっふふふ、キツそうだね、」

それはね淫紋なんだよ、
この触手は強烈な電気で神経に淫紋を刻むっていう、
そういうやつ。

ただ神経に直接つて凄く負担になるから簡単に感覚が
壊れて無くなっちゃうんだけど、
あんなに注射してるのはそうならないように、
死なないようにしようとする液体なんだ。」



更に増やされた触手により数を増し繰り返されるスパーク。

体のあちこちで弾けるそれはアイシャの神経を無理矢理引き裂くようにこじ開け、自分の領土を作り出すとそのままに周辺を侵略し始める。

その痛みは人間ならば即死、マールゴハンターと言えど無事では済まないレベルの物だったのだが、注入された液体の効果で神経は雷淫をそのままに即座に再生され致命的な領域には至らない。

だがダメージ自体が無くなる訳では当然ない、元は淫気であるこの電撃は人間の淫らを増幅しながらもそのダメージと溶け合い、痛みと痺れを伴う強烈な感覚を生み出し、強制的で理解不能な絶頂をアイシャに与え続け、

その暴虐と淫虐の証はアイシャの体に雷淫の度に不揃いで整わない淫紋を次々に増やしていくのだった。

『ooooooooo』

「よし、できた。」



「それ以上はやめて頂けますか?。」

アイシヤに突き立てられようとしていた刃、その全てが三瞬で破壊される、同時にアイシヤを捕らえる肉十字架にも何本もの矢のようなものが突き刺さっていた。

驚愕するクリステッラが振り返ると通路の奥から背中に大きな羽を持った人影が姿を現す。

だがクリステッラには彼女の顔に覚えがあった。

「ふふん、お前の事も知ってるよ、
カルミア!。」

「……?…… うーん、じゃあそれでいいです。」

早速本題なのですが、
人質とそちらのアイシヤを開放してくれませんか?。」

若干困惑するカルミアの反応に室内が三瞬静寂に包まれる、だがそれに関して追及する事無くカルミアは本題に入る。

そしてその静寂の間に突き刺さったカルミアのダートから迸った電流により肉十字架が崩壊し、意識を失ったアイシヤがドサリと床にうつ伏せで倒れる。

「はあ？何言つてんの？。」

「ここでお互い辞めておきませんか、というお話です、もし応じて下さるなら今回の件は穏便に済ませたいと考えています。」

「そ、そんなの信じるかよ！、どうせ解放した瞬間わたしを殺す気だろ！」

「いいえ、応じて頂けるなら命の保証、そして今後人間を襲わないと約束して頂けるなら特区への斡旋もさせて頂きますよ。」

「はあ？、はあ？、マジでなに言つての？」

クリステッラは困惑していた。

アイシヤが3人組で行動するという事は情報屋から聞いていた、なので名前は間違っていたがカルミアの事も把握していたし、助けに来るだろう事も予想していた。

しかし少し前に建物内への侵入者を察知したので仕方なく処刑を急いだが想像以上に3人目は早く到着してしまった。

クリステッラはこの場を切り抜ける算段を頭の中で構築していたが、その3人目から彼女の想定していない提案がされたのだった。

「お仲間を人質に取られてるのに余裕だね、自分の立場分かってる?。」

「ええ、もちろん。」

「じゃあさぞかし怒ってるでしょ?、仲間をこんな風にされてさ、いいよ? 殺しあおつか? ほら来なよ?。」

カルミアを煽る言動をするもさりとかわされ内心動揺するクリステッラ。

仲間を2人も人質に取られているのだ、怒り狂い今すぐにも自分を殺しに来るだろう、その時にこそクリステッラが講じていた3人目対策の罠が有効になるのだが、肝心の彼女は怒りに震えているでもなく慌てている様子も無い。

「マーゴハンターが人質にされるというのはたまにある話なのです。」

それにこの交渉の発案者はそのアイシャですから。」

「は?。」

「経緯はどうあれ貴方のご家族を奪った事実は変わらない、だからもし自分がどんな状況になつていても交渉はして欲しいとアイシャから頼まれました。」

「わけわかんない、だつたら初めからお姉ちゃんを殺さなきゃよかったじゃん。」

「それに関してはどうしようも無く、争わねばならなかったようです。」

幸いアイシャも生きていますように、後日じっくりと話しあつては如何でしょう?。」

「は?…」

うう…ぐうう…!、ふつざけるな!、

お姉ちゃんを殺したヤツと話?、馬鹿にするなよマーゴハンター!。」

突然齒を食いしばり全身を震わせ怒りを露わにするクリステッラ。

彼女は困惑の極致にいた、

これまで自分の思い通りに行かない事等無かつた。だから今回も順調に事が運び続けた、全ては自身の掌だとそう思っていた。

実はそれはクリステッラの姉がこれまで彼女を甘やかし続けた故なのだが、

それに気付こうとさえしない彼女は浅い対応力は少しの予想外の出来事で対応が出来なくなり、その困惑が怒りという別の感情にシフトしてしまつたのだつた。

「交渉は決裂、という事で宜しいのでしょうか？」

怒りに震えるクリステッラに特に残念そうでもなく交渉の最終確認をするカルミア。

「あたりまえだろ！、お前立場を弁えろよ、
今この場で2人同時に人質を殺してやる！」

お前はどちらしか選べない、

わたしをバカにした罰だ！」

「……どちらか、ですが、では私はアイシヤを選びます。」

「はははっ、あつさり決めたな！、
じゃああつちの方が殺される所を見せてやるよ！」

予想外に簡単に事を決めた
カルミアを嘲るクリステッラが
念じると、部屋にあったテレビが灯り
レントが捕まっている部屋の映像が映し出される。



「あらあら、あれは本気で怒ってますね、冷静にと言ったのに……」

残酷な笑みを讀えたまま、素っ頓狂な声を上げるクリステッラ、

彼女の目に映ったのは、異質な武器を構えた女が人質であるレントを抱えている姿だった。

肝心の切二は何本もの杭のような物で壁に貼り付けられ、大きさも半分以下になっただけで、床に散らばったと肉片は緑に輝く砂に変わって消えていこうとしている所だった。

「だ……だれだあれは！ど……ことだよ！」

なんとか間抜けな顔を元に戻し、カルミアに画面の中の事を問い正すクリステッラ。

「仲間ですけど？」

「お、お前らは3人で行動してるんだろ！、なんで他の奴がいるんだよ！」

「不思議な事を言いますね、確かに私たちはよく3人で任務を行います、が、友達や仲間と組む事だつてありますよ？」

「意味わかんない!、なんでだよ!。」

「……、

なるほど、貴方のお姉さんは
あなたに友達や仲間というのを
教えなかったんですね。」

あなた、本当に、

妹、

なのですか?。」

「なんだと……?。」

意味はよく分かっていないが
自分や姉を侮辱されたと敏感に察知した
クリステッラから三転して
殺意のオーラが吹きあがるが
カルミアは構わず続ける。

「他者と関わる事を教えず、
どこかでひっそりと囲うように育てる、

それって家だけで飼う
ペットみたいなものじゃないですか?。」

「!!、お姉ちゃんを!!、バカにするな!!!。」

「あら、捕まっちゃいましたね。」

怒りの叫びと共にクリステッラがアイシヤとレントを捕らえたボンテージを放ち、それが瞬く間にカルミアの全身を拘束する。

「これでお前は終わりだ！、お前の能力はふ……。」

「でもすぐには効果が出ないのでしょう？、このあなたの空間にエネルギーを閉じ込める能力は？」

「……う……な……っ！？」



クリステッラの勝ち誇った表情が二瞬で凍り付く、初めて会ったはずのカルミアが何故自分の能力の事を知っているのか？

「あなたが持ち帰ろうとしていたアイシヤのサブアニメ、通信機能があるんですよ？、自慢気に能力を語っていましたよね？」

その答えはクリステッラがアイシヤに武装解除させた時に外させた腰と胸のサブアニメだった。アイシヤを殺した後の首級のつもりでいたそれの原因があったのだ。

「くっ…分かったからなんだつてのよ。」

能力がバレたとはいえ、彼女にはまだ手段がある。
クリステッラの体が足から透明になり
空間に溶け込んでく。

「お前はどうせ動けない、効果が出るまで
じっく
きや!!?。」

虚空から可愛い悲鳴が上がると、
そこからクリステッラの姿が
露わになっていく、

その肩には一本のダートが刺さっていた。

「なんで、わたしの場所が…。」

「その程度では丸見えですよ、少しマ―ゴハンターをバカに
し過ぎです。」

「くっ…そ。」

「…はあ、もういいですよ。」

（まったく、あんなにボロボロになって…。）

倒れるアイシャをちらりと見てから
大きな溜息をつくカルミア。

「私も今ではマールゴの友人がいるので話し合う事は
大事だと思っています。
ですがいきなりこういう手段に出る輩に話を通じると思えないと
アイシャには反対したんですよ。」

カルミアは今回の件でアイシャが1人で行くという
事に反対していた。

マールゴ（ハンター）を人質に取るという事は
一般人を人質に取る事と訳が違う。
＝相応の準備とマールゴ（ハンター）を抑え込めるだけの
戦力が無ければ出来る事ではないのだ。

しかしアイシャは脅迫の内容を聞いて以前殺してしまった
はぐれマールゴ（ハンター）が関わっている事を知ると
カルミアがいくら反対しても、
「あたしには受け止める義務がある。」
と譲ろうとしなかった。

（それをフォローするのも妻の務め、ですけどね。）

アイシャとは長い付き合いである、
そうだったアイシャを止める術が
ない事は分かっていた。
だからアイシャが出ていった後に相応の準備をし、
そしてきちんと彼女の頼み通り交渉もした。

ここがカルミアの限界のラインだった。

「さて、先程の私の仲間ですが、レントを救った後にこちらに来る手筈になっています。」

面倒くさがりですが友達の事になると感情的になる人なので、おそらく後15分程でここに到着するでしょう。」

ここまでボロボロにされているとは思わなかったのですが、本当はアイシヤを二刻も早く医療機関に運びたかったが、先に決着をつけなければならぬ。

独白を終えたカルミアはマールゴに対して最後通告を行う。

「あなたには私を殺して逃げる、以外ここから逃げる術はありません。」

私はこの場からあなたを逃がすつもりはありませんし、たとえ運良く逃げられても地の果てまで徹底的に追いつめ、必ず殺しに行きます。

ですが時間を掛ければ仲間が到着します、あなたに選択できる事は、

限られています。」

気をつけの姿勢で拘束され動けないカルミアが自分を追える筈が無い、逃げようと思えば逃げられる筈。

そう思うクリステッラだが、薄い微笑みの中に隠れる禍々しい何かに背を向けて逃げる事を本能が警鐘を鳴らしており、その初めての感覚に足が、体が上手く動かせない。

「あなたがアイシヤの意識を奪ってくれて、幸運でした。」

「先程、私はマリーゴハンターが人質にとられる事はたまにある事だと言いましたが、

実は身内では初めてでした。」

クリステッラが雇った情報屋は3流以下だった、

それ故にカルミアの名前を間違えていたし容姿もきちんと言わっていなかった。



「なので恥ずかしながら少し慌ててしまいました、装備の精査もせずに詰め込んで来てしまったのです。」

「少々不細工な翼ですので、
これをアイシヤに見られなかったのは僥倖でした。」

だからもしカルミアの背中に
装着されたものが、

いつもの3倍程の大きさになる程の
武器を満載した

「翼」ではないものであると

気付けたならば、

クリステツラの未来は
変わっていたのかもしれない。

「では、始めましょうか。」





「残りの時間、
私にとってははきつと短いですが、
あなたにとってはどうなのでしょうね？」

クリステッラ

中級マーゴ。

下級マーゴの時に出会ったエラピュリスという
元マーゴハンターに育てられたという特殊な経歴を持っている。

自身から生み出した分身(ボンテージ)をまとわせた
者のクリステッラが望んだものを
彼女が作り出す特殊な空間にボンテージを通じて
閉じ込める事が出来るという
中級マーゴながら上級マーゴに匹敵する能力を持っている。

他にも自身を透明化出来る等
能力自体は優秀なのだが、姉であるエラピュリスがマーゴの
生態について無知だった為、
実戦経験をはじめとする普通のマーゴが成長の過程で
経験しなければならない事の殆どが出来ていない為、
自身の能力を正確に把握できておらず、

姉に過保護に育てられた為、
この世は自分の思う通りになると思っている節があり、
我儘で自分勝手な性格になってしまった。

